

修
禪
寺
物
語

岡本綺堂

(伊豆の修禪寺しゆぜんじに頼家よりいえの面おもてといふあり。作人も知れず。由来もいれず。木彫きでんの仮面かりんにて、年を経たるまま面目分明ならぬと、いわゆる古色蒼然こしきそうぜんたるもの、觀来くわんたつて一種の詩趣をおぼゆ。當時を追懐おぼしてこの稿成る。)

登場人物

面おもて作つく師り

夜や叉や王おう

夜叉王の娘

かつら

同

かえで

かえでの婿

春彦

源げん左ざ金きん吾ご頼ご家

下か田げ五や郎す景安

金かな窪くぼ兵ひょう衛えい尉ゑい尉ゑい行ぎやう親しん

修禅寺の僧

行親の家来など

第一場

伊豆の国狩野かののの庄、修禅寺村（今の修善寺）桂川のはとり、夜叉王の住家。

藁葺わらぶきの古びたる二重家体。破れたる壁に舞樂の面などをかけ、正面に紺暖簾こんのれんの出入口あり。下手に炉を切りて、素焼の土瓶どびんなどかけたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹。そのうしろは畑を隔てて、塔の峰つづきの山または丘などみゆ。

元久元年七月十八日。

（二重の上手につづける一間の家体は細工場さいくわばにて、三方に古りたる蒲がま簾すだれをあうせり。庭さきには秋草の花咲きたる垣かきに沿うて荒むしろを敷

き、姉娘桂、二十歳。妹娘楓、十八歳。相對して紙砧かみざねを擣うつてゐる。

かつら (やがて砧の手をやめろ) 一ときあまりも擣ちつづけたので、

肩も腕うでも痺しびるるような。もうよいほどにして止やみようでな

いか。

かえで とは言うものの、きのうまでは盆休みであつたほどに、き

ようからは精出して働こうではござんせぬか。

かつら 働きたくはお前ひとりとこで働くがよい。父様ととにも春彦どのに

も褒ほめられようぞ。わたしはいやいや、いやになつた。(投

げ出すように砧を捨つ)

かえで 貧てわざの手業てわざに姉妹きょうだいが、年ごろ擣うちなれた紙砧かみざねを、とかくに飽

きた、いやになつたと、むかへに變かるお前まへがこのごろの素

振りは、どうしたことでござるかおう。

かつら

(あざ笑う) いや、昔とは変らぬ。ちつとも変らぬ。わたいは昔からこのようなことを好きではなかった。父さまが鎌

倉くらにおいてなされたら、わたいらもこうはあるまいものを、

名聞うまうもんを好まれぬ職人氣質かたぎとして、この伊豆いずの山家に隠れ栖すま、

親につれて子供までも鄙ひなにそだち、いようことなうに今の

身の上トヤ。さりとしてこのままに朽ち果てようとは夢にも

思わぬ。近いためは今わたいらが擣うつてゐる修禪寺紙、

はじめは賤いやしい人の手につくられても、色好紙いろあしがみとよばれて

世に出づれば、高貴のお方の手にも触ふる。女子おなごとてもそ

の通りトヤ。たとい賤いやしゆう育つても、色好紙の色よくば、

関白大臣將軍家のおそばへも、召い出されぬとは限かぎるまい

に、賤しずの女めがなりわいの紙砧しずね、いつまで擣うちおぼえたとして
何となろうぞ。いやになつたと言いうたが無む理りか。

かえて

それはおまえが口癖くぐせに言うことどやが、人には人それぞれ
の分ぶんがあるもの。將軍家のお側近そばぢう召めさるるなどと、夢の
ようなことをたのみにして、心ばかり高たかう打ちあがり、末
はなんとなろうやら、わたしは案あんじられてなりませぬ。

かつら

お前まへとわたしとは心が違ちがう。妹いもうとのおまえは今年十八で、春
彦ひこという男おとこを持もつた。それに引きかえて姉あねのわたしは、
二十歳はたちという今日の今いままで、夫おとこもさだめずに過あしたは、あ
たら一生いっせいを草やの家やに、住すみ果みつまいと思おもえばこそどや。職しやく
人風情ふでいの妻めかけとなつて、満足まんじつして暮くすおまえらに、わたし
の心こころはわかわかかるまいのう。(空嘯そらうそく)

(楓の婿春彦、二十余歳、奥より出づ。)

春彦 桂どの。職人風情とさも卑しい者のように言われたが、職

人あまたあるなかにも、おもてつくり面作師といえは、世に恥かゝから

ぬ職であらうぞ。あらためて申すに及ばねど、わが日本開ひら

びやく闢以来、はじめて舞樂のおもてを刻まれたは、もつたいな

くも聖徳太子、つづいて藤原淡海公、弘法大師、倉部くらべの

春日かすが、この人々より伝えて今に至る、由緒正ゆいしよき職人とは

知られぬか。

かつら それは職が尊いのでない。聖徳太子や淡海公という、その

人々が尊いのトヤ。かの人々も生業なりわいに、面作りはなされま

いが……。

春彦 生業に―ては卑しいか。さりとは異なことを聞くものトヤ

の。この春彦が明日にもあれ、稀代の面おもてをつくり出して、

天下一の名を取っても、お身は職人風情と侮あなどるか。

かつら 言かんでもないこと、天下一でも職人は職人トや、殿上人や

弓取りとは一つになるまい。

春彦 殿上人や弓取りがそれほどに尊いか。職人がそれほどに卑

しいか。

かつら はて、くだい。知れたことトやに……。

(桂は顔をそむけて取り合わず。春彦、むっとして詰めよるを、楓は

あわてて押し隔てる。)

かえで ああ、これ、一旦こうと言ひ出したら、あくまでも言ひ募

るが姉あねさまの氣質、逆ううては悪い。いさかいはもう止

てくだされ。

春彦 その氣質を知らばこそ、日ごろ堪忍していれど、あまりと

言えば詞が過ぐる。女房の縁につながりて、姉と立つれば

つけ上り、ややもすればわれを軽むる面憎さ。仕儀によ

つては姉とは言わさぬ。

かつら おお、姉と言われずとも大事ござらぬ。職人風情を妹婿に

持ったとて、姉の見得にも手柄にもなるまい。

春彦 まだ言うか。

(春彦はまたつめ寄るを、楓は心配して制す。この時、細工場の簾の

うちにて、父の声。)

夜叉王 ええ、騒がしい。鎮まらぬか。

(これを聴きて春彦は控える。楓は起って蒲簾をまけば、伊豆の夜叉

王、五十余歳、烏帽子、筒袖、小袴にて、鑿と槌とを持ち、木彫の

飯面いひめんを打うつてゐる。膝ひざのあたりには木の屑くずなど取り散らちたり。)

春彦 由なきことを言い募もつて、細工のおさまたげをも省みぬ不

調法、なにとぞ御料簡ごりょうけんくたさりませ。

かえて これもわたしが姉様に、意見がまましいことなど言うたが基もと。

姉様も春彦どのも必ず叱しかつて下さりまするな。

夜叉王 おお、なんで叱しかろう、叱しかりはせぬ。姉妹の喧嘩いさかいはままある

ことトヤ。珍めづらしいゆうもあるまい。時に今日ももう暮くる

ぞ。秋のゆう風が身にみみるわ。そちたちは奥へ行ゆつて夕

飯まの支度、燈火あかりの用意よういでもせい。

二人 あい。

(桂と楓は起おつて奥に入る。)

夜叉王 のう、春彦。妹とは違ちがうて気がさの姉トヤ。同ト屋根の下

に起き臥すれば、一年三百六十日、面白からぬ日も多か
ろうが、何事もわゝに免れて料簡せい。あれを産んだ母親
は、そのむかし、都の公家衆に奉公したものの、縁あつてこ
の夜叉王と女夫になり、あずまへ流れ下つたが、育ちが育
ちとて氣位高く、職人風情に連れ添うて、一生むなく朽
ち果つるを悔みながらに世を終つた。その腹を分けた姉妹、
おなご胤とはいいながら、姉は母の血をうけて公家氣質、
妹は父の血をひいて職人氣質、子の心がちがえば親の愛も
違うて、母は姉胤、父は妹胤。思い思いに子どももの胤
肩争いから、埒もない女夫喧嘩などしたこともあつたよ。
ははははははは。

春彦

そう承われは桂どのが、日ごろ職人をいやみ嫌い、世に

きこえたる殿上人か弓取りならでは、夫に持たぬと誇らるるも、母御ほはごの血筋をつたえしため、血は争われぬものでござりまするな。

夜叉王

ドヤによつて、あれが何を言おうとも、滅多に腹は立てまいぞ。人を人とも思わず、氣位きぐらい高う生まれたは、母の子なれば是非がないのドヤ。

(暮の鐘きこゆ。奥より楓は燈台を持ちて出づ。)

春

彦 おお、取り紛れて忘れていた。これから大仁おほひとの町まで行つ

て、このあいだ詛あつちえておいた鑿うみと小刀さすがをうけ取つて来ねばなるまいか。

かえて きょうはもう暮れまゐた。いつそ明日あすになさされては……。

春 彦 いや、いや、職人には大事の道具ドヤ。一刻も早う取り寄

せておこうぞ。

夜叉王 おお、職人はその心がけがのうてはならぬ。更ふけぬ間に、

ゆけ、行け。

春彦 夜とは申せど通いなれた路、一ときほどに戻つて来まする。

(春彦は出てゆく。楓は門かどにたちて見送る。修禅寺の僧一人、燈籠とうろうを

持ちて先に立ち、つづいて源の頼家卿、二十三歳。あとより下田五郎

景安、十七八歳、頼家の太刀をささげて出づ。)

僧 これ、これ、將軍家のおいのびドヤ。粗相とさうがあつてはなり

ませぬぞ。

(楓ははつと平伏ひれふす。頼家主従すすみ入れば、夜叉王も出て迎える。)

夜叉王 思おもいもよらぬお成りとして、なんの設けもござりませぬが、

ままずあれへお通りくださりませ。

(頼家は縁に腰をかける。)

夜叉王 して、御用の趣は。

頼家 問わずとも大方は察しておろう。わが面体を後のかたみに残さんと、さきにその方を召し出し、頼家に似せたる面を作れと、絵姿までも遣わしておいたるに、日を経るも出来せず、幾たびか延引を申し立てて、今まで打ち過ぎは何たることトヤ。

五郎 多寡が面一つの細工、いかに丹精を凝らすとも、百日とは費すまい。お細工仰せつけられは当春の初め、その後すでに半年をも過ぎたるに、いまだ献上いたさぬとはあまりの懈怠、もはや猶予は相成らぬと、上様の御機嫌さんざんトヤぞ。

頼家

予は生まれついでに性急トヤ。いつまで待てど暮せど埒あ
かず、あまりに齒痒はがゆう覚ゆるまま、この上は使いなど遣わ
すこと無用と、予がトきトきに催促にまいった。おのれ何
ゆえに細工を怠りおるか。仔細をいえ、仔細を申せ。

夜叉王

御立腹おそれ入りまゝしてござりまする。もったいなくも征

夷大將軍、源氏の棟梁とうりょうのお姿を刻めとあるは、職のほまれ、

身の面目、いかでか等閑なふざりに存ぞままようや。御用うけたま

わりてすでに半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜昼

となく打ちまゝしても、意にかなうほどのもの一つもなく、

さらに打ち替え作り替えて、心ならずも延引に延引をかさ

ぬまましたる次第、なにとぞお察さくださりませ。

頼家

ええ、催促の都度におなトことを……。その申まわけは聞

き飽いたぞ。

五郎

この上はただ延引とのみで相済むまい。いつのころまでにはかならず出来するか、あらかどめ期日をさだめてお詫を申せ。

夜叉王

その期日は申し上げられませぬ。左に鑿をもち、右に槌を持ってば、面はたやすく成るものと思し召すか。家をつくり、塔を組む、番匠ばんしやうなどとは事変りて、これは生なき粗木あらきを削り、男、女、天人、夜叉、羅刹らせつ、ありとあらゆる善悪邪正のたましいを打ち込む面作師。五体にみなぎる精力ぢりきが、両の腕かひなにおのずから湊あつまる時、わがたましいは流るるごとく彼に通いて、はじめて面も作られます。ただその時は半月の後か、一月の後か、あるいは一年二年の後か。わ

れながら碓しほとはわかりませぬ。

僧

これ、これ、夜叉王どの。上様は御自身も仰せらるふごとく、至って御性急ごせいきゆうでおわします。三島の社の放はな鰻うなぎを見るように、ぬらりくらりと取止めのないことばかり申し上げていたら、御疳癖ごかんせきがいよいよ募もろうほどに、こなたも職人冥利みょうり、いつのころまでと目を限きって、いかと御返事を申すがよかろうぞ。

夜叉王

ドヤと言うて、出来ぬものはのう。

僧

なんの、こなたの腕うでで出来ぬことがあろう。面教師も多くあるなかで、伊豆の夜叉王といえ、京鎌倉までも聞えた者ドヤに……。

夜叉王

さあ、それゆえに出来ぬと言うのドヤ。わいも伊豆の夜叉

王と言え、人にも少くは知られたもの。たとひお咎め受
きようと、己が心に染まぬ細工を、世に残すのはいかに
も無念トヤ。

頼家 なに、無念トヤと……。さらばいかなる祟りを受きようと
も、早急には出来ぬというか。

夜叉王 恐れながら早急には……。

頼家 ひひ、おのれ覚悟せい。

(癩癖募り頼家は、五郎のささげたる太刀を引取って、あわや抜

かんとす。奥より桂、走り出づ。)

かつら まあ、まあ、お待ちくださいませ。

頼家 ええ、退け、のけ。

かつら まずお鎮まりくださいませ。面はただ今献上いたします。

のう、父様。

(夜叉王は黙して答えず。)

五郎 なに、面はずでに出来ておるか。

頼家 ええ、おのれ。前後不揃いふぞろいのことを申し立てて、予をあざむこうでな。

かつら いえ、いえ、嘘うそいつわりではござりませぬ。面はたくかに出来ております。これ、父様。もうこの上は是非がござんすまい。

かえで ほんにそうドヤ。ゆうべようやく出来たというあの面を、いつそ献上なされては……。

僧 それがよい、それがよい。こなたも凡夫ドヤ。名も惜しくうが、命も惜しくう。出来た面があるならば、早う

上様にさゝあげて、お慈悲をねがうが上分別ドやぞ。

夜叉王 命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知ったことでは

ない。黙っておいやれ。

僧 さりとて、これが見ていらりようか。さあ、娘御。その面

を持って来て、ともかくも御覧に入れたがよいぞ。早う、

早う。

かえて あい、あい。

(かえては細工場へ走り入りて、木彫の仮面めんを入れたる箱を持ち出づ。

桂はうけ取りて頼家の前にささぐ。頼家は無言にて桂の顔をうちまも

り、心少しく解けたる体なり。)

かつら いつわりならぬ証拠、これ御覧くださりませ。

(頼家は仮面を取りて打ちながめ、思わず感嘆の声をあげる。)

頼家 おお、見事トヤ。よう打ったぞ。

五郎 上様おん顔に生写トヤ。

頼家 ひひ。(飽かず打ち成る)

僧 さればこそ言わぬことか。それほど物が出来ていな

ら、とこう決つておられたは、夜叉王どのも氣の知れぬ男

トヤ。ははははは。

夜叉王 (形をあらためる) 何分にもわが心になわぬ細工、人には

見せどと存どまいたが、こう相成つては致し方もござりま

せぬ。方々にはその面をなんと御覧なされます。

頼家 さすがは夜叉王、あっぱれの者トヤ。頼家も満足したぞ。

夜叉王 あっぱれとの御賞美はばかりながらおめがね違い、それ

は夜叉王が一生の不出来。よう御覧トませ。面は死んでお

りまする。

五 郎 面が死んでおるとは……。

夜叉王 年ごろあまた打つたる面は、生けるがごとくと人も言い、

われも許しておりました、不思議やこのたびの面に限つ

て、幾たび打ち直しても生きたる色なく、たましいもなき

死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。

死人の面ではござりまする。

五 郎 そちはさように申しても、われらの眼にはやはり生きたる

人の面……。死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉王 いや、いや、どう見直しても生いもうある人ではござりませぬ。

いかも眼まなこに恨みを宿し、何者をか呪のろうがごとき、怨靈怪異

なんどのたぐい……。

僧 あ、これ、これ、そのような不吉のことは申さぬものトヤ。

御意ごいにかなえばそれで重畳ちゆうとう、ありがたくお礼を申されい。

頼家 ひひ。ともかくにもこの面は頼家の意にかのうた。持ち

帰かへるぞ。

夜叉王 強たかつて御所望ごしやもうとござりますれば……。

頼家 おお、所望トヤ。それ。

(頼家は頤あごにて示せば、かつら心得て仮面を箱に納め、すこしく媚こびを含みて頼家にささぐ。頼家はさらにその顔をトつと視る。)

頼家 いや、なあかさねて主人あふとに所望がある。この娘を予が手も

とに召つかう仕つかいとう存ぞんずるが、奉公つかさする心はないか。

夜叉王 ありがたい御意にござりますが、これは本人の心まかせ、

親の口から御返事は申まう上げられませぬ。

(桂は臆せず、すすみ出づ。)

かつら 父様。どうぞわたくしに御奉公を……。

頼家 うい奴ドヤ。奉公をのぞむと申すか。

かつら はい。

頼家 さらにこれよりその面をささげて、頼家の供へてまいれ。

かつら かゝこまりました。

(頼家は起つ。五郎も起つ。桂もつづいて起つ。楓は姉の袂たもとをひかえ

て、心もとなげこころもとに囁く。)

かえで 姉さま。おまえは御奉公に……。

かつら おまえは先ほど、夢のような望みと笑うたが、夢のような

望みが今かのうた。

(かつらは誇りがに見かえりて、庭に降り立つ。)

僧 やれ、やれ、これで愚僧もまず安堵あんどいたした。夜叉王どの、

あすまた逢あいまーようぞ。

(頼家は行きかかりて物につまづく。桂は走り寄りてその手を取る。)

頼家 おお、いつの間にか暗うなった。

(僧はすすみ出でて、桂に燈籠を渡す。桂は仮面の箱を僧にわたし、

われは片手に燈籠を持ち、片手に頼家をひきて出づ。夜叉王はどつと

思案の体なり。)

かえて 父さま、お見送りを……。

(夜叉王は初めて心づきたるごとく、娘とともに門口に送り出づ。)

五郎 そちへの御褒美ごほうびは、あらためて沙汰さたすぞ。

(頼家らは相前後して出てゆく。夜叉王は起ち上りて、しばらく黙然

としていたりしが、やがてつかつかと縁にあがり、細工場より槌を持

ち来たりて、壁にかけたるいろいろの仮面を取り下し、あわや打ち碎

かんとす。楓はおどろきて取り継すぐ。

かえて ああ、これ、なんとなさる。おまえは物に狂われたか。

夜叉王 せっぱ詰まりて是非におよばず、拙つたなき細工を献上したは、

悔んでも返らぬわが不運。あのような面が將軍家のおん手

に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と宝物帳しよにも記さ

れて、百千年の後までも笑いをのこさば、一生の名折れ、

末代の恥辱、所詮しよせん夜叉王の名は廢すたった。職人もきよう限り、

再び槌は持つまいぞ。

かえて さりとは短気でござりまうよう。いかなる名人上手でも細

工の出来不出来は時の運。一生のうち一度でもあつばれ

名作が出来ようならば、それがすなわち名人ではござりま

せぬか。

夜叉王　むむ。

かえて　拙い細工を世に出したをそれほど無念と思ひ召さば、これ
からいよいよ精出して、世をも人をもおどろかすほどの立
派な面を作り出し、恥を雪いでくださりませ。

(かえては継りて泣く。夜叉王は答えず、思案の眼を瞑とんでいる。日
暮れて笛の声遠くきこゆ。)

第二場

おなぐく桂川のはとり、虎溪橋こけいききょうの袂。川辺には柳幾本いくもとたちて、
芒すすきと芦あしとみだれ生いたり。橋を隔てて修禪寺の山門みゆ。同ト
日の宵。

(下田五郎は頼家の太刀を持ち、僧は仮面めんの箱をかかえて出づ。)

五郎 上様は桂どのと、川辺づたいにそぞう歩き遊ばされ、お供

のわれわれは一足先へまいれとの御意であったが、修禪寺
の御座所ももはや眼のまえトヤ。この橋の袂たもとにたたずみて、
お帰りを暫時相待とうか。

僧 いや、いや、それはよろ／＼ゆう／＼ござるまい。桂殿という嬪女

をお見出しあつて、浮れあるきに余念もおわさぬところへ、われわれのごとき邪魔外道げだうが付き纏まとうては、かえつて御機嫌を損ずるでござらうぞ。

五郎 なにさまのう。

(とは言いながら、五郎はなお不安の体にてたたずむ。)

僧 ことに愚僧はお風呂ふろの役、早う戻もどつて支度をせねばなるまい。

五郎 お風呂とておのずと沸いて出づる湯ゆトヤ。支度を急ぐこともあるまいに……。まずお待ちやれ。

僧 はて、お身にも似合わぬ不粹をいうぞ。若き男女おとこめがむつまじゆう語らうていとところに、法師や武士は禁物トやよ。

ははははは。さあ、ござれ、ござれ。

(無理に袖をひく。五郎は心ならずも曳かふるままに、打ち連れて橋を渡りゆく。月出づ。桂は燈籠を持ち、頼家の手をひきて出づ。)

頼家 おお、月が出た。河原づたいに夜ゆけば、芒にまどる芦の

根に、水の声、虫の声、山家やまがの秋はまたひとゝおの風情かぜいト

やのう。

かつら 馴なれてはさほどにもおばえませぬが、鎌倉山の星月夜とは

事変りて、伊豆の山家の秋の夜は、さぞお寂さびしゆうござり

ましよう。

(頼家はありあう石に腰打ちかけ、桂は燈籠を持ちたるまま、橋の欄に凭よりて立つ。月明らかにして虫の声きこゆ。)

頼家 鎌倉は天下の覇府はふ、大小名の武家小路、薨いらかをならべて綺羅きら

を競えど、それはうわべの榮えにて、うらはおそろき罪
の巷ちまた、悪魔の巢ぞ。人間の住むべきところでない。鎌倉な
どへは夢も通わぬ。(月を仰ぎて言う)

かつら

鎌倉山に時めいておわくならば、日本一の將軍家、山家そだ

ちのわれわれは下司げすにもお使いなされまいに、御果報拙つたない

がわたくしの果報よ。忘れもせぬこの三月、窟詣いわせもでの下向げこう

路うち、桂谷の川上で、はじめて御目見得をいたしました。

頼家

おあ、その時そちの名を問えば、川の名とおなド桂と言う
たな。

かつら

まだそればかりではござりませぬ。この窟ふたもとのみなかみには、

二本の桂の立木ありて、その根よりおのずから清水を噴き、

末は修禪寺にながれて入れば、川の名を桂とよび、またそ

頼家

の樹をめかて女夫の桂と昔よりよび伝えてありますると、お答え申し上げましたれば、おまえ様はなんと仰せられました。非情の木にも女夫はある。人にも女夫はありそうな……と、つい戯たわれに申したのう。

かつら

お戯れかは存じませぬが、そのお詞ことばが冥みよ加かにあまりて、この願がんかならずかなうようと、百日のあいだ人にも知らさず、窟へ日参いたせしに、女夫の桂のくしありて、ゆくえも知れぬ川水も、嬉うれしき逢あ瀬せにながれ合ひ、今月今宵おん側近う、召し出されたる身の冥加……。

頼家

武運つたなき頼家の身近うまいるがそれほどに嬉うれしいか。そちも大方は存じておろう。予には比企ひきの判官能員はんがんよくわの娘若狭わかといえり側女そばめありしが、能員はろびその砌みぎりに、不憫あびんや

若狭も世を去った。今より後はそちが二代の側女、名もそのままだに若狭と言え。

かつら
あの、わたくしが若狭の局つばねと……。ええ、ありがとうござりまする。

頼家
あたたかき湯の湧くところ、温かき人の情も湧く。恋をう

くないく頼家は、ここに新いき恋を得て、心の痛みもようやく癒えた。今はもうもうの煩惱ぼんごうを断って、安らけくこの地に生涯を送りたいものトヤ。さりながら、月には雲の障さわりあり。その望みもはかなく破れて、予に万一のことあらば、そちの父に打たせたるかのおもてを形見と思え。叔父の蒲殿かぼどのは罪のうして、この修禅寺の土となられた。わが運命も遅かれ速かれ、おなト路をたどろうも知れぬぞ。

(月かくれて暗し。籠手、臍当、腹巻したる軍兵二人、上下よりうかがい出でて、芒むらに潜む。虫の声にわかにかやむ。)

かつら あたりにすだく虫の声、吹き消すように止みまゝたは……。
頼家 人やまいり。心をつけよ。

(金窪兵衛尉行親、三十余歳。烏帽子、直垂、籠手、臍当にて出づ。)

行親 上、これに御座遊ばされまゝたか。

頼家 誰トヤ。

(桂は燈籠をかざす。頼家透しみる。)

行親 金窪行親でござりまする。

頼家 おお、兵衛か。鎌倉表より何とてまいった。

行親 北条殿のおん使いに……。

頼家 なに、北条殿の使い……。さてはこの頼家を討とうがため

な。

行親　これは存^ぞも寄らぬこと。御機嫌伺いとして行親参上、は

かに仔細もござりませぬ。

頼家　言うな、兵衛。物の具に身をかためて夜中の参入は、察す

るところ、北条の密意をうけて予を不意撃ちにすゝ巧みで

あろうか……。

行親　天下ようやく定まりとは申せども、平家の残党はう^つび殲

さ^ず。かつは函根^{はこね}より西の山路に、盗賊^{はう}ども徘徊^{はいかい}する由

きこえまゝたれば、路次の用心としてかようにいかめし^ゆ

う扮装^{いつてた}ち申した。上に対したてまつりて、不意撃ちの狼藉^{ろうじせき}

など、いかで、いかで……。

頼家　たといいかように陳ずるとも、憎き北条の使いなどに対

面無用トヤ。使いの口上聞くにおよばぬ。帰れ、かえれ。

(行親は騒がず。いずかに桂をみかえる。)

行親 これにある女性にょしやうは……。

頼家 予が召仕いの女子かちごトヤよ。

行親 おんつっ謹みの身をもつて、素性すしやうも得知れぬ賤いやの女子どもを、

おん側近つう召されは……。

(桂は堪えず、すすみ出づ。)

かつら 兵衛どのとやら、お身は卜者うらやか人相見か。初見ういげんざん参のわらわ

に対して、素姓賤すしやういき女子などと、迂濶うかつに物を申されな。

妾わらわは都のうまれ、母は殿上人にも仕え者ぞ。まゝて今は

將軍家のおそばに召されて、若狭の局とも名乗る身に、一

応の会釈もせて無礼の雑言ぞうごんは、鎌倉武士というにも似ぬ、

さりとは作法をわきまえぬ者のう。

(冷笑あざわらわれて、行親は眉をひそめる。)

行親 なに。若狭の局……。して、それは誰に許された。

頼家 おお、予が許した。

行親 北条どのにも謀はからせたまわず……。

頼家 北条がなんどや。おのれらは二口目には北条という。北条

がそれほどに尊いか。時政も義時も予の家来どやぞ。

行親 さりとて、尼御台あまみだいもおわりますに……。

頼家 ええ、くどい奴。おのれらの言うこと、聴くべき耳は持た

ぬぞ。退すまれ、すされ。

行親 さほどにおむずかり遊ばされては、行親申し上ぐべきよう

もござりませぬ。仰せに任せて今宵はこのまま退散、委細

は明朝あらためて見参の上……。

頼家 いや、重ねて来ること相成らぬぞ。若狭、まいれ。

(頼家は起ち上りて桂の手を取り、打ち連れて橋を渡り去る。行親はあとを見送る。芒のあいだに潜み一軍兵出づ。)

兵一 先刻より忍んで相待ち申したに、なんの合図もござりませ

ねば……。

兵二 手を下すべき機もなく、空しく時を移し申した。

行親 北条殿の密旨を蒙り、近寄って討ちたてまつらんと今宵ひ

そかに伺候したるが、さすがは上様、早くもそれと覺られて、われに油断を見せたまわねば、無念ながらも仕損じた。

この上は修禅寺の御座所へ寄せかけ、多人数一度にこみ入って本意を遂ぎようぞ。上様は早業の達人、近習の者ども

にも手だれあり。小勢の敵と侮りて不覚を取るな。場所は狭し、夜いくさどや。ううたえて同士撃ちすな。

兵 ばつ。

行親 一人はこれより川下へ走せ向うて、村の出口に控えたる者どもに、即刻かかれと下知を伝えい。

兵 一心得申した。

(一人は下手に走り去る。行親は一人を具して上手に入る。木かげより春彦、うかがい出づ。)

春彦 大仁の町から戻る路々に、物の具したる兵者が、ここに五

人かくこに十人屯して、出入りのものを一々詮議するは、合点がゆかぬと思うたが、さては鎌倉の下知によって、上様を失いたてまつる結構な。さりとは大事どや。

(遠近かちこちにて寝鳥ねとりのかどろき起つ声。下田五郎は橋を渡りて出づ。)

五郎 常はさびーき山里の、今宵は何とやらん物さわがーく、事

ありげにも覚ゆるぞ。念のために川の上下かみしもを一わたり見廻うまわ

ろうか。

春彦 五郎どのではおわさぬか。

五郎 おお、春彦か。

(春彦は近づきてささやく。)

五郎 や、なんと言う。金窪の参入は……。上様を……。ーかと

左様か。むむ。

(五郎はあわただしく引返ゆかんとする時、橋の上より軍兵一人長巻ながまきをたずさえて出で、無言にて撃つてかかる。五郎は抜きあわせ、たちまち斬きつて捨つ。軍兵数人、上下より走り出で、五郎を押つ

取りまく。）

五郎 やあ、春彦。ここはそれがうが受け取った。そちは御座所

へ走せ参ドて、この趣を注進せい。

春彦 はっ。

（春彦は橋をわたりて走り去る。五郎は左右に敵を引き受けて奮闘す。）

第三場

もとの夜叉王の住家。夜叉王は門にたちて望む。修禪寺にて早鐘を撞く音きこゆ。

(向うより楓は走り出づ。)

かえて 父様。夜討ちドヤ。

夜叉王 おお、むすめ。見て戻ったか。

かえて 敵は誰やらわからぬが、人数はおよそ二三百人、修禪寺の御座所へ夜討ちをかけたぞ。

夜叉王 にわかనికిこゆる人馬の物音は、何事かと思うたに、修禪

寺へ夜討ちとは……。平家の残党か、鎌倉の討手か。こりや容易ならぬ大変ドヤのう。

かえて

生憎あやにくに春彦どのはありあわさず、なんとしたことでござりまゝような。

夜又王

われわれがうろうろ立ち騒いだとてなんの役にも立つまい。

ただそのなりゆきを観ているばかりドヤ。まさかの時にはかやこ父子が手をひいて立ち退くまでのこと。平家が勝とうが、

源氏が勝とうが、北条が勝とうが、われわれにはかかり合

いのないことドヤ。

かえて

それドヤと言うて不意のいくさに、姉様あねさまはなんとなさりよ

うか。もゝ逃げ惑うて過失あやまちでも……。

夜又王

いや、それも時の運ドヤ、是非もない。姉にはまた姉の覚

悟がわろうよ。

(寺鐘と陣鐘とまどりてきこゆ。楓は起ちつ居つ、幾たびか門に出てて心痛の体^{てい}。向うより春彦走り出づ。)

かえて おお、春彦どの。待ちかぬまゝした。

春彦 寄せ手は鎌倉の北条方、いかも夜討ちの相談を、測らず木

かげで立聴きして、その由を御注進申し上ぎようと、修禅寺までば駈^かけつけたが、前後の門はみな困^{つばさ}まれ、翼なれば入ることかなわず、残念ながらおめおめ戻った。

かえて では、姉様の安否も知れませぬか。

春彦 姉はさておいて、上様の御安否さえもまだわからぬ。小勢ながらも近習の衆が、火花をちらして追っつ返しつ、今が

合戦最中トヤ。

夜叉王 なにを言うにも多勢に無勢、御所方ごしよがたとても鬼神くわんじんではあるま

いに、勝負は大方知れてある。とても逃れぬ御運の末トヤ。

蒲殿ふぢといい、上様かみさまと言いい、いかなる因縁いんねんかこの修禪寺しゆぜんじには、土の底ちまで源氏の血ちが沁ひみるのう。

(寺鐘てらかね烈れつくきこゆ。春彦夫婦は再び表うらをうかがい見みる。)

かえて おお、おびただしい人の足音あしな……。鎬しのぎを削くる太刀たちの音ね……。

春彦 ここへも次第しだいに近づちかづいてくるわ。

(桂けいは頼家の飯面いひづを持ちて顔かほには髪かみをふりかけ、直垂ひたたれを着きて長卷ながまきを持

ち、手負てかいの体ていにて走り出でて、門口かどぐちに來きたりて倒たふる。)

春彦 や、誰たれやら表うらに……。

(夫婦は走り寄よりて扶たすけ起たち、庭にわさきに伴ともい入いるれば、桂はまた倒たふれ

る。)

春彦 これ、傷は浅うござりまするぞ。心を確かに持たせられい。
かつら (息もたゆげに) おお妹……。春彦どの……。父様はどこに
トヤ。

夜又王 や、なんと……。

(夜又王は怪しみて立ちよる。桂は顔をあげる。みなみな驚く。)

春彦 や、侍衆さむらいとかもいのほか……。

夜又王 おお、娘か。

かえて 姉さまか。

春彦 して、この体ていは……。

かつら 上様お風呂を召さるる折から、鎌倉勢が不意の夜討ち
……。味方は小人数、必死にたたかう。女めでこそあれこの

桂も、御奉公はどめの御奉公納めに、この面おもてをつけてお身

がわりと、早速さそくの分別……。月の暗きを幸いに打物とつて庭におり立ち、左金吾頼家これにありと、呼ばわり呼ばわり走せ出づれば、むらがる敵は夜目遠目に、まことの様ぞと心得て、うち洩もらさどと追つかくる。

夜叉王

さては上様お身替りと相成つて、この面にて敵をあざむき、ここまで斬り抜けてまいったか。(血に染みたる仮面めんを取りてドットと視る)

春彦

われわれすらも侍衆と見あやまったほどなれば、敵のあざむかれたも無理ではあるまい。

かえで

とは言うものの、あさましいこのお姿……。姉様死んで下さりまするな。(取り継りて泣く)

かつら

いや、いや。死んでも憾うらみはない。賤しずが伏屋ふせやでいたずらに、

百年千年生きたとて何となろう。たとい半とき一ときでも、
將軍家のおそばに召し出され、若狭の局という名をも給わ
るからは、これで出世の望みもかのうた。死んでもわたし
は本望トヤ。

(云いかけて弱るを、春彦夫婦は介抱す。夜叉王は仮面をみつめて物
言わず。以前の修禪寺の僧、頭より袈裟けさをかぶりて逃げ来たる。)

僧 大変トヤ、大変トヤ。かくもうて下され、隠もうてくださ
れ。(内に駆け入りて、桂を見てまたおどろく) やあ、ここに
も手負いが……。おお、桂殿……。こなたもか。

かつら くて、上様は……。

僧 お悼いたわーや、御最期トヤ。

かつら ええ。(這い起きてきつと視る)

僧 上様ばかりか、御家来衆も大方は斬り死……。わーらも傍そば

杖づえの怪我せぬうちと、命からがら逃げて来たのドヤ。

春彦 では、お身がわりの甲斐かひもなく……。

かえて ついにやみやみ御最期か。

(桂は失望してまた倒る。楓は取りつけて叫ぶ。)

かえて これ、姉さま。心を確かに……。のう、父様。姉さまが死

にまするぞ。

(今まで一心に仮面をみつめたる夜叉王、はじめて見かえる。)

夜叉王 おお、姉は死ぬるか。姉もさだめて本望であらう。父もま

た本望ドヤ。

かえて ええ。

夜叉王 幾たび打ち直してもこの面に、死相のありありと見えたる

は、われ拙きにあらず。鈍きにあらず。源氏の將軍頼家卿
がかく相成るべき御運とは、今という今、はじめて覺つた。
神ならでは知らしめされぬ人の運命、まづわが作にあらわ
れしは、自然の感応、自然の妙、技芸神しんに入るとはこのこ
とよ。伊豆の夜叉王、われながらあつばれ天下第一トヤのう。

(快げに笑う)

かつら
(おなづく笑う) わたしもあつばれお局様トヤ。死んでも思
いおくことない。ちつとも早う上様のおあとを慕うて、冥めい
土のおん供……。

夜叉王
やれ、娘。わかき女子が断末魔の面、後の手本に写してあ
きたい。苦痛を堪こらえてしばらく待て。春彦、筆と紙を……。

春彦
はつ。

(春彦は細工場に走り入りて、筆と紙などを持ち来たる。夜叉王は筆を執る。)

夜叉王 娘、顔をみせい。

かつら あい。

(桂は春彦夫婦に扶けられて這いよる。夜叉王は筆を執りて、その顔を模写せんとす。僧は口のうちにて念仏す。)

—幕—

使用書体

かな／欣喜堂 KOずりM

漢字・約物・記号／Ra花蓮華

欧文・数字／Hoefler Text Regular

組版

島崎肇則

公開

二〇一九年七月三一日

底本

「日本の文学 七七 名作集(一)」中央公論社

一九七〇(昭和四五)年七月初版発行

初出

「文芸倶楽部」

一九一一(明治四四)年一月

入力

土屋隆

校正

小林繁雄

二〇〇六年四月三〇日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。